「私のイチバンボシ」第8話

水瀬真理佳

○道路・車内（朝）

陽斗が運転する車内。

えま、助手席から落ち着かない様子で陽斗をチラッと見る。

バッグからお菓子を取り出して、

えま「お菓子持って来たので、何か食べたいものあったら言ってくださいね」

陽斗、前を見たまま、

陽斗「やった。何があるの？」

えま「えーっと。飴、グミ、ポッキー、あと歌舞伎揚げです」

陽斗「ポッキー欲しいかも」

えま「はーい」

陽斗、口を開けて待っている。

えま、ゴクリと唾を飲み込む。

慎重に袋から一本取り出して陽斗の口元に持っていく。

陽斗、口で挟んで、

陽斗「ありがと」

えま、運転しながら口を動かす陽斗の

横顔をうっとり見つめる。

えまM「なんかCMになりそう……」

○（えまの想像）山沿いの道

運転している陽斗。

陽斗N「雨の日も晴れの日も。俺の相棒は走り続ける」

陽斗、歯を見せて笑う。

○道路・車内（朝）

陽斗「えま？　えーま。えまってば」

陽斗、運転をしながらえまのことを呼び続ける。

えま、我に返る。

えま「あ、はいっ！」

陽斗「カーリーがポッキー食べそうな勢いだよ」

カーリーがお菓子に反応して鼻をくんくんさせている。

えま「ダメダメ。カーリーはこっちね」

えま、犬用のおやつをカーリーにあげる。

えま「陽斗くんプライベートでもドライブとか結構するんですか？」

陽斗「そうだね。丸一日オフあったらドライブ行くことが多いかも。誰かメンバー乗せて」

えま「なんかごめんなさい。せっかくのお休みなのに……しかも今日って本当は引っ越しのためのお休みだったんですよね？」

陽斗「なんで？　俺今日すごい楽しみにしてたんだよ。ドラマとツアー終わったら三日休みもらうっていうのはマネージャーと元々約束してて、引っ越しは、まぁあと二日でなんとかなる！」

えま「（嬉しそうに）私も、すごく楽しみにしてました！」

陽斗、前を見ながらニコッと笑う。

陽斗「なんか曲かける？」

と、スマホを出そうとする。

えま「私かけますよ！　何がいいですか？」

えま、自分のスマホを取り出す。

陽斗「えまに任せる」

えま「私に任されると自動的にユニクラの曲になりますけど……？」

陽斗「そうだったー！　ちょっと恥ずかしいけど、でもいいよ。逆にユニクラ縛りでいこう」

えま「じゃあ私的ドライブにぴったりな曲チョイスしますね」

えま、曲を流す。

陽斗「あーー！　俺もこれ思ってた！」

えまと陽斗、体でリズムを取ながら口ずさむ。

陽斗、ハモリパートを歌う。

えま、目と口を見開く。

えま「この近さで生歌ドライブは豪華すぎます！　お金払わせてください！」

陽斗、プッと吹き出す。

陽斗「お金払いますは笑う。俺このパートじ

ゃないから緊張したぁ」

えま「そうですよね！　私超レアな歌聴けちゃったってことだ～！」

陽斗、えまの横顔をチラッと見て口角を上げる。

○草津温泉・温泉街

湯煙に包まれた広場。

観光客が写真を撮ったりハンディグルメを食べている。

○同・駐車場

バタンと車のドアを閉める音。

えま「すごい湯煙！　ゆで卵の匂いだ！」

陽斗、帽子を被る。

陽斗「じゃあ行きますか。それよりお腹空かない？」

えま「空きました！」

陽斗「先にお昼にしよっか」

えま「私色々調べて来たんですけど……」

えま、スマホを操作する。

陽斗、えまのスマホを覗き込む。

陽斗「やっぱ蕎麦屋多いよね」

えま「麺だとすぐお腹空いちゃいますか？」

陽斗「お昼蕎麦にして、温泉街で色々買って食べるのは？」

えま「そうですね。そうしましょう！」

えま、カーリーを下ろしてリードを持つ。

歩き出す二人と一匹の後ろ姿。

○蕎麦屋・店内

えまと陽斗、二人がけの席に座る。

カーリー、床に丸まる。

店員「お待たせしました。焼きネギ蕎麦のお客様」

陽斗、えまの方に手を向ける。

えま「はい」

と、小さく手を挙げる。

店員、えまの前にお盆を置く。

店員「こちらが天せいろになります」

店員、陽斗の前にもお盆を置く。

陽斗、頭を下げる。

店員「ごゆっくりどうぞ」

と、下がる。

えま「すごい天ぷらですね！」

陽斗「えまも食べなよ」

と、天ぷらのお皿を机の真ん中に置く。

えま「（目を輝かせて）え～！　いいんですか!?」

陽斗「天ぷら好き？」

えま「大好きです！　迷ったんですけど、全部食べきれるか分かんなかったし、焼きネギ蕎麦にも惹かれちゃって……」

陽斗「食べれなかったら俺が食べたのに」

えま「陽斗くんて結構ご飯モリモリ食べますよね」

陽斗「確かに。あんま自覚なかったけど、そういえばメンバーの中でも柊也の次に食べる方かも」

えま「陽斗くん、美味しい美味しいってたくさん食べてくれるから嬉しいってママがずっと言ってました」

陽斗「それは美香さんのご飯がめちゃ美味いからね」

えま「うわぁ、さすが！　彼氏にしたいランキングと結婚したいランキングダブル一位に輝いた男！　女子の心を掴む言葉を分かってらっしゃる」

陽斗「（照れながら）どーもどーも、ありがとうございます」

えま「照れるの可愛い」

えま、ニヤニヤしながら陽斗を見る。

陽斗「こっち見んなー」

陽斗、えまの前に手を伸ばす。

えま「向かい合って座ってるのにそれはムリですよ」

えま、フフッと笑う。

×　×　×

机の皿が片付いている。

陽斗「そろそろ出るか」

えま「はい！」

えま、バッグから財布を取り出して伝票に手を伸ばす。

陽斗、伝票を前から取って立ち上がる。

えま「あ、ちょっ！」

陽斗「（笑いながら）払わせるわけないじゃん」

と、立ち上がってレジに向かう。

えま、慌てて陽斗を追いかける。

○同・店の外

えま「ごちそうさまでした」

と、お辞儀する。

陽斗「いーえ」

えま「温泉街は私が出しますから！　運転もしてもらってるし申し訳なさすぎます！」

陽斗「じゃあそれはえまに奢ってもらおうかな」

えま「もちろんです！　何食べますか？」

陽斗「俺さ、この鮎の串食べたいんだよね」

と、スマホで写真を見せる。

えま「私もこれ見ました。多分あっちの方にありますよ！」

陽斗「食べたばっかりだけどいける？」

えま「鮎くらいなら全然大丈夫です！」

陽斗「良かった。そういえばえまも朝からしっかり食べるよね。ほら最近の子は朝ごん抜いたりする子が多いって聞くじゃん？」

えま「……それ言わないでください！　いつもつい食べ過ぎちゃうの気にしてるんですからぁー」

えま、肩を落とす。

陽斗「なんで？　ご飯ちゃんと食べるってすごくいいことじゃん。健やかでよろしい」

陽斗、えまの頭を撫でる。

えま、赤くなった顔を隠すように帽子を深く被る。

陽斗「でも美香さんのご飯はつい食べ過ぎちゃうのも無理はないよ」

えま「ですよね!?　そうだ仕方ない。ママのご飯が美味しすぎるのがいけないんだ！」

えまと陽斗とカーリー、話しながら歩く。

○草津温泉街・串焼き屋前

えまと陽斗、鮎の串を購入。

えま「いただきまーす」

陽斗、えまにスマホを向けて食べている様子を動画で撮影。

陽斗「どう？」

えま「めちゃくちゃ美味しいです！　陽斗くんも食べてください」

えま、陽斗のスマホを貰って陽斗に向ける。

えま「では食リポをお願いします」

陽斗、咳払いをしてひと口食べる。

陽斗「んー！　なんかこのふっくらとした身とこの塩加減が……美味いです……ねぇ、もう一回やっていい？」

えま、クスクス笑う。

えま「今ので全然いいと思いますよ？　さすがです」

陽斗「笑ってんじゃん！」

えま「アハハ、だってぇ～」

カーリー、二人の足元でアピール。

陽斗「ごめんな。カーリーには味が濃すぎるからダメなんだ」

陽斗、しゃがんでカーリーを撫でる。

えま「カーリーはこっちね」

えま、陽斗の隣にしゃがんで犬用のおやつをあげる。

カーリー、夢中で食べる。

○同・広場

えまと陽斗、足湯に浸かる。

○同・土産物屋

えまと陽斗、お土産を選ぶ。

○同・車内（夕方）

えまと陽斗とカーリー、車に乗り込む。

陽斗「帰りにちょっと実家寄っていい？　誰もいないらしいんだけどお土産だけ置いてきたくて」

えま「もちろんです！　うちのお土産まで買ってもらっちゃってすみません……結局私が買ったのって鮎の串だけじゃないですか！」

陽斗「だって、今日は居候させてもらったお礼だからさ」

えま「お礼なんてそんな……」

陽斗「というのはまぁただの口実で。本当は普通にえまと出かけたかっただけなんだけどね」

えま「え……？」

陽斗、ニコっと笑う。

陽斗「さ、帰ろ！」

えま「……はい」

陽斗、車を発進させる。

○道路・車内（夕方）

陽斗「本当はさ、女の子が喜びそうなオシャレな店探そうと思ってたんだけど。俺大和みたいにそういうのあんま詳しくないし。メンバーに聞いたりもしたんだけど、結局俺がちゃんとリードできることの方がいいんじゃないかって言われてドライブにしたんだ。俺ばっか楽しくてえまに楽しんでもらえたか自信ないけど」

と、苦笑いする。

えま「そんなことないです！　私も……私の方が楽しんでました！」

陽斗「いや、俺の方が楽しんでたよ」

えま「絶対私です！」

えま、運転する陽斗を見つめる。

陽斗「フッ……えまってこういう時負けず嫌いだよな」

えま「陽斗くんはこういう時大人気ないです！」

陽斗「そうかなぁ～？　俺立派な大人なんだ

けどな」

陽斗、運転しながらくしゃっと笑う。

えま、陽斗の横顔を儚げに見つめる。

えま「……私、単純だから……」

と、呟く。

陽斗「単純だから……？」

えま、ふっと我に返る。

えま「あれっ。何言おうとしたんだっけなぁ！」

と、誤魔化す。

陽斗「なんだそれ。頑張って思い出してよ」

と、優しく笑う。

えま、目を閉じて静かに深呼吸する。

○田中家・外観（夜）

車が停止する。

陽斗「ちょっと待っててね」

陽斗、ベルトを外して車を降りる。

えま、窓から家の外観を見る。

二階建ての新しい戸建て住宅。

門には【田中】の表札。

えま「これが陽斗くんの生家……」

えま、お参りのように手を合わせる。

えま「陽斗くんの引っ越しが決まって良かったかもしれない。これ以上一緒にいたら、私……」

カーリー、「くぅん」と鳴いて不思議そうな顔でえまを見る。

えま、シフトノブに手を伸ばしてそっと触れる。

ドアが開く音と共に慌てて手を引っ込める。

陽斗が車に戻って来る。

陽斗「お待たせ」

陽斗、シートベルトを締めて車を出す。

○道路・車内（夜）

えま「陽斗くんのお家、すごい新しいですね」

陽斗「一回全部リフォームしたんだよね。俺も姉ちゃんも実家出たからその時に」

えま「なるほど」

陽斗、窓の外の隅田川をチラッと見る。

陽斗「懐かしいなぁ。俺よくこの川沿いでサッカーの練習してたんだ。夏は涼しいし、冬は星がちょこっと見えたりして」

えま「この川沿いってよくドラマのロケとかしてる所ですよね？」

陽斗「そうそう。昔はこんなに整備されてなかったけどね」

えま「今度カーリーと散歩しに来ようかな」

陽斗「それいいかも。広いからカーリーも喜ぶよ」

カーリー、えまの膝の上で気持ちよさそうに眠っている。

えま「本人は寝ておりますが」

陽斗、カーリーを見て、

陽斗「はしゃぎ回ってたもんね」

えま、頷きながらカーリーを撫でる。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

えま「ただいまー！」

カーリーを抱いたえまと陽斗がリビングに入って来る。

美香「お帰り～！　陽斗くん運転お疲れ様。ありがとうね」

美香、えまからカーリーを預かる。

美香「ご飯できてるけど二人ともお腹空いてる？」

えまと陽斗、顔を見合わせて、

えま「うん！」

陽斗「もうペコペコです」

美香「（笑って）良かった。カーリーは先にちゃちゃっとお風呂入っちゃおうね」

カーリー、嫌そうな顔をする。

○同・リビングダイニング（夜）

えまと陽斗、ダイニングテーブルで夜ご飯を食べながら今日の出来事を美香に話す。

美香、楽しそうに話を聞く。

○同・陽斗の部屋の前（朝）

えま、陽斗の部屋のドアをノックする。

陽斗の声「はーい」

えま、ドアを開ける。

えま「陽斗くん、何か手伝うことありますか？」

陽斗「とりあえず大丈夫かな。荷物はほとんど事務所に置かせてもらってたし、ここから持って行くものはこれで収まりそう」

と、パッキング済みのスーツケースを触る。

○同・玄関（朝）

えまと美香とカーリー、玄関で陽斗を見送る。

陽斗「本当にお世話になりました」

と、頭を下げる。

美香「こちらこそ。あの人が無理やりうちに連れて来なきゃ、陽斗くんホテルとかでゆっくりできたのに。ごめんね？」

陽斗「いえいえ。むしろすっかり実家みたいにくつろいじゃってすみませんでした」

美香「忙しいと思うけどムリしないでね。部屋はいつでも空いてるから、また遊びに来てね。ご飯だけでもいいのよ！」

陽斗「美香さんのご飯恋しくなってすぐ来ちゃいそうです」

美香「もう、陽斗くんったら～」

美香、嬉しそうにしているとスマホが鳴る。

美香「あら、電話。ちょっとごめんね」

美香、その場を離れる。

陽斗、えまの方を向く。

陽斗「……えまも色々ありがとね。えまのおかげですごく楽しかった」

えま「私は何も……なんかいまだに陽斗くんが目の前にいるのが信じられなくて、夢見てるんじゃないかって思っちゃいます」

陽斗「（冗談まじりに）田中陽斗から担降りしようとかなってない？　大丈夫？」

えま「……それが、実は最近大和くんのことが……」

陽斗「（焦りながら）は？　それリアルガチな話……？」

えま「（悪戯顔で）なーんて！　冗談です！」

陽斗「なんだよー！」

えま「フフッ。何があっても担降りなんてしません！　今までもこれからも、私はずっと田中担ですから！」

陽斗「そういうの心臓に悪いって。マジで焦ったじゃん！」

陽斗、ホッとする。

えま「そんな私一人減ったくらい大したことないですよ〜ファンクラブの会員数もどんどん増えてますし！」

陽斗「そんなことないよ。俺にとって大切な一人だから」

えま「……」

えまと陽斗、見つめ合う。

陽斗、真剣な顔でえまに一歩近づく。

陽斗「あのさ、えま」

えま「……はい」

陽斗「俺……」

陽斗が言葉を続けようとするとカーリーが吠える。

カーリー「ワンッワンッ！」

えまと陽斗、互いに一歩下がる。

美香の足音が聞こえてくる。

美香「あ、良かった陽斗くんまだ行ってなかった！」

美香が戻って来る。

陽斗、ニコっと笑う。

陽斗「そろそろ行きます。本当にお世話になりました」

美香「またね～」

と、手を振る。

えま、放心した顔で手を振る。

ドアが閉まる直前にえまと陽斗の視線が絡む。

ドアがバタンと閉まる。

えま「（なんて言おうとしてたんだろう）

と、ドアを見つめる。

美香、えまを見て、

美香「もしかして、ママ邪魔しちゃった？」

えま「（上ずった声で）な、何がっ？」

えま、部屋に戻って行く。

美香、ワクワクした顔で、

美香「ねぇ、あの二人どうしたの？」

と、足元のカーリーに話しかける。

カーリー、嬉しそうに廊下を走って行く。

美香、ふむふむと頷く。

○同・えまの部屋（朝）

えまの机の上の写真立てには草津で撮ったえまと陽斗の写真。

机上の日めくりカレンダーは一月になっている。

○陽斗のマンション・玄関～廊下（深夜）

陽斗、玄関で靴を脱ぎその場で壁にもたれて座り込む。

陽斗「あーーー今日長かったぁーーーー」

陽斗、スマホを見ると4：10の表示。

陽斗「ハハッ。コレもう朝じゃん」

と、伸びをする。

○同・廊下

インターホンの呼び出し音とスマホの着信音が鳴り続けている。

陽斗「んっ……」

陽斗、廊下の床の上で目を覚ます。

床に落ちているスマホに手を伸ばす。

佐藤からの着信画面。

陽斗、飛び起きて電話に出る。

陽斗「もしもしごめん今起きた！　うん。十分で降りる。いや、五分！」

佐藤の声「陽斗さん待って、違うんです！」

陽斗、電話を切ってリビングにドタバタ走って行く。

○道路・車内

佐藤、陽斗を乗せて運転している。

佐藤「やっぱり一時間前に来ておいて正解でした」

陽斗「いやほんとマジで助かったー。さすが大樹」

佐藤「ちゃんと寝れましたか？　また廊下で行き倒れたりしてないですよね？　あれ初めて見つけた時超ビビったんですから」

陽斗「うん。今日も目が覚めたらバッチリ床だったね」

佐藤「あー！　家に帰ったらとにかくベッドに直行してくださいってあれほど言いましたよね!?　陽斗さんすぐ床で寝ちゃうから！」

陽斗「もう家入った瞬間安心して力抜けちゃうんだよ。ベッドまでたどり着かない」

佐藤「ダメですよ。そんなんじゃ疲れとれないし、むしろ疲れます」

陽斗「だよなぁ。引っ越しの片づけもまだ終

わってないし、やることたくさんだー」

佐藤「今日の収録はゲストいないのでちょっと巻くかもしれないですね。あ、でも終わったらちょっと事務所で打ち合わせ入りました」

陽斗「了解〜」

○高校・教室

谷口、クラスに進路希望の紙を配る。

谷口「いいかー。来年の今頃は受験真っ只中だからな。泣いても笑ってもあと一年。やりきったって胸張って言える一年にしろよ！　頑張ればちゃんと結果はついてくるからな！　まぁ、ついてこないこともあるけど！」

男子「谷先菱えること言うなよー」

女子「せっかく途中までいいこと言ってたのに台無しぃ」

えま、ぼーっと前を見ている。

桃香「えーま！」

桃香がえまの席まで来て顔を覗き込む。

えま「ん？」

桃香「自販機行かない？」

えま「うん、行く」

えま、立ち上がって桃香と教室を出る。

○同・廊下

えまと桃香、話しながら歩く。

桃香「なんか心ここに在らずって感じだね」

えま「そうかな……？」

桃香「田中さん引っ越しちゃったんだっけ？」

えま「うん……一週間前に」

桃香「それは寂しいわ」

えま「いまだにね、陽斗くんがうちにいたことか、全部私の妄想だったんじゃないかって思うんだよね。まぁ写真とかメッセージが残ってるから現実だって分かるんだけど」

桃香「そうだ。連絡先知ってるじゃん！　連絡とってないの？」

えま「とってない」

桃香「連絡すればいいじゃん！　（猫撫で声で）『元気ですか～？　私は陽斗くんがいなくて毎日寂しいです。戻って来て？♡』って」

えま「ちょっと！　バカにしてるでしょ。私そんな言い方しないからぁー」

えまと桃香、自販機の前に着く。

桃香「何にしよっかな～」

えま「え！　つぶこが入ってる！」

えま、白ブドウのジュースを指さす。

桃香「これえまがよく飲んでるやつだよね」

えま「そう。美味しいよ！」

桃香「じゃあこれにしよっと。えまも飲む？」

えま「飲む！」

桃香、ボタンを二回押して缶が二本出てくる。

桃香「はい」

と、えまに渡す。

えま「ありがと。教室戻ったらお金渡すね」

桃香「いいよ。元気ないえまにプレゼント」

えま「桃香ぁ……ありがとう！　大好き！」

えま、桃香に抱きつく。

桃香「チョロいな～」

と、苦笑する。

桃香「そういえば、えまは進路決まった？」

えま「まだぁ」

桃香「どうすんの？」

えま「どうすればいいかな？」

桃香「私が決めていいの？」

えま「試しに。私ってどんな仕事が向いてる？」

桃香「（ニヤニヤしながら）お嫁さん。田中さんに永久就職」

えま「もう！　真面目にぃ～」

えまと桃香、じゃれ合いながら廊下を歩く。

○事務所・廊下（夜）

陽斗と佐藤、会議室を出て廊下を歩い

ている。

奥から宮本と秘書が歩いてくる。

宮本、陽斗に気が付く。

宮本「おい陽斗ぉぉ！」

宮本、大股で陽斗たちの方へ向かってくる。

佐藤「なんか社長怒ってません？」

陽斗「嫌な予感しかしない……」

と、くるりと背を向けて来た道を戻ろうとする。

宮本「おい！　コラ待て陽斗！　佐藤、陽斗捕まえとけ！」

佐藤「うぇ⁉　あ、はい！」

佐藤、陽斗の手を掴んで引き止める。

陽斗「俺の味方じゃないのかよ！」

佐藤「あ、すいません。なんか反射的に……」

と、手を離す。

宮本、陽斗たちの元に着く。

宮本「なんで逃げようとしたんだ？　ん？」

陽斗「……そんな形相で向こうから近づいて

こられたら誰だって逃げたくなりますよ」

宮本「逃げるってことは、何かやましいことがあるからだろぉ？　俺に言ってないこと、あるんじゃないか？　なぁ陽斗？」

陽斗「……この間、えまちゃんとドライブに行かせてイタダキマシタ」

と、ボソボソ呟く。

佐藤「えぇっ!?　そうなんですか!?」

宮本「行きましたってなんだ！　事後報告じゃねーか！　事前に報告、連絡、相談！　社会人の基本だ！　なぁ佐藤」

佐藤「はい！　報連相大事です！」

陽斗、佐藤を睨む。

佐藤、クスクス笑う。

陽斗「……すいません」

宮本「全く。油断も隙もないな。だいたいお前はな、」

秘書「社長。車が待ってます」

秘書が話に割って入る。

宮本、仕方ないなという顔。

宮本「陽斗」

陽斗「（気まずそうに）……はい」

宮本「たまには遊びに来いよ。……えまが寂しがってるって」

陽斗、目を丸くする。

陽斗「あっ……はい！　行きます！　むしろいんですか？」

宮本「ただし、俺もいる時だけだぞ！　いいな！　二人きりなんてまだ早い！」

秘書「ほら行きますよ」

秘書、喋り続けようとする宮本の背中を押していく。

陽斗、宮本の後ろ姿を見て口角を上げる。

佐藤、ニヤニヤしながら

佐藤「ちょっと陽斗さぁん？　俺その話聞いてないですよ！　詳しく！」

陽斗「……特に話すことナーシ！」

と、上機嫌で歩き出す。

佐藤「あ、待ってください！」

佐藤、陽斗を追いかける。

○陽斗のマンション・リビングダイニング（夜）

陽斗、段ボールを畳む。

ウッド調に暖色系で統一された部屋。

家具や配置も前と変わらない。

陽斗、キッチンでコーヒーを淹れる。

○同・ベランダ（夜）

陽斗、マグカップを持ってベランダに出る。

キャンプ用の椅子が置いてある。

陽斗「うわ寒っ！」

陽斗、椅子に座ってコーヒーを飲みながらえまとのメッセージ画面を開く。

陽斗「……寂しいなら連絡してくればいいじゃん」

と、口をへの字にする。

○宮本家・リビングダイニング（夜）

えま、コップを持ってベランダの窓を開ける。

美香「どこ行くの？」

えま「ちょっと気分転換～」

美香「そんな薄着じゃ風邪引くから上着着なさいね」

えま「うん大丈夫―」

○同・ベランダ（夜）

えま、ベランダに出る。

えま「寒ぅ～」

えま、コップで温まりながら陽斗とのメッセージ画面を開く。

えま、〈お疲れ様です！　映画の予告みました。絶対初日に行きます！〉と打ち込む。

えま「なんか馴れ馴れしすぎかな……？」

えま、送信を押そうとして手が止まる。

○陽斗のマンション・ベランダ（夜）

陽斗、椅子に座ってスマホを見つめる。

陽斗「せっかく慣れたのに、離れた途端なんか急に……」

陽斗、〈元気？〉と送ろうとして文字を消す。

陽斗「超緊張する……」

○宮本家・ベランダ（夜）

えま、手すり壁にもたれてスマホを見ながら空に掲げる。

えま「なんか緊張する！！」

えま、送信を押そうとすると大和から着信通知。

えま「ウソ、大和くっ……ゴホッゴホッ」

えま、咳が治まってから咳払いをして電話に出る。

えま「もしもし」

大和の声「えまちゃん久しぶり！　いま大丈夫？」

えま「お久しぶりです！　はい大丈夫です！」

大和の声「俺ら三月にドームでコンサートやるんだけどさ」

えま「はい！　情報解禁されてたの見ました！」

大和の声「えまちゃんの席とっとくから良かったら来てよっていうお誘い！」

えま「いいんですか!?　ぜひ行かせてください！」

えま、即答する。

大和の声「良かった。断られるかと思った」

えま「大和くんのお誘いを断るわけないです！」

大和の声「（笑いながら）でも俺のこと忘れてたよね」

えま「あー！　そのことはもう言わない約束じゃないですか～」

大和の声「アハハ。そうだった」

えま、頬が緩む。

○陽斗のマンション・ベランダ（夜）

陽斗、えまの番号に発信してスマホを耳に当てる。

ツーツー音がする。

陽斗「話中か」

と、耳から離したスマホを見つめる。

翼から着信通知。

陽斗「もしもし」

翼の声「もしもし？　今どこ？」

陽斗「もう家だよ」

翼の声「だよな。共有スケジュールに今日『番組収録』しか書いてなかったからそうだと思った」

陽斗「そう。意外と巻けたからわりと早く帰れた。で、どうした？」

翼の声「まだ新年会してなかったじゃん？　陽斗の新居も行きたいし、お前んちであけおめパーティーとかどう？　いいよな？　鍋しよ！　材料はみんなで持って行くからよろしく」

陽斗、「ふはっ」っと吹き出す。

陽斗「俺まだいいって言ってないんだけど。

まぁ別にいいけど」

翼の声「俺らが行く方が荷ほどきも進むっしょ？　どうせまだ終わってないだろうし」

陽斗、部屋の中を見る。

空いてない段ボール箱が残っている。

陽斗「余計なお世話だっつーの」

翼の声「じゃ、そういうことで！　みんなには連絡しとくー」

陽斗「ん」

翼の声「じゃ、おやすみー。ちゃんとベッドで寝ろよー」

陽斗「はいはい。おやすみ」

と、通話を切る。

翼からメッセージ通知が来る

〈翼：陽斗の新居であけおめ鍋するよ〉

メンバーが次々とスタンプを送って来る。

〈凛太郎：俺人生ゲーム持って行くね！〉

陽斗「みんな返信早すぎだろ」

と、歯を出して笑う。

○同・リビングダイニング（夜）

テーブルの上には鍋とつまみとお酒が並ぶ。

翼「それでは皆さん新年あけおめ！

陽斗の新居万歳、カンパーイ！」

一同「カンパーイ！」

陽斗と悠真と柊也、失笑しながら乾杯してコップに入ったビールを飲む。

柊也「乾杯の音頭独特すぎだろ」

陽斗「それな」

凛太郎「それにしてもはるピーいい部屋だね！

前の部屋にすごく似てる」

と、立ち上がって部屋の中を歩いて回る。

陽斗「そう。前の家気に入ってたから大樹に

お願いして似てる物件探してもらった」

悠真「窓からの景色も最高だね」

悠真と柊也、コップを持って窓の傍に行く。

眼下には都会の夜景が広がる。

翼「ベランダも広くね？」

陽斗「今はちょっと寒いけど、あったかいコーヒー飲みながらよくボーっとしてる」

翼「なんだよそれ超いいじゃん！」

×　×　×

五人、カーペットに座って人生ゲームをしている。

翼「ところでみんな、最近どうよ」

悠真「いや、その聞き方がどうよ」

翼「俺はもう姪っ子に貢ぎまくり。ほら、ヤバ可愛くね？」

と、スマホで赤ちゃんの写真を見せる。

柊也「うわ、超かわいい」

陽斗「お兄ちゃんの子供だっけ？」

翼「そう。もうまーじ可愛い。おもちゃ買い

すぎてお義姉さんに怒られてる」

凛太郎「俺はね、最近ジム行き始めた！」

悠真「お前なんでツアー終わってから鍛え始めてんだよ」

一同、笑う。

凛太郎「それがさ。SNSでエゴサしてたら『凛くん意外と腹筋割れてなくいのカワイイ』とか結構書いてあってさ。さすがにスイッチ入った」

柊也「まぁ、次に向けてってことで」

悠真「俺は車買った」

陽斗「マジ？　何買ったの？」

悠真「これ」

と、スマホで写真を見せる。

有名な高級外車。

翼「えーヤバ！」

柊也「（笑いながら）ちょっと待って。悠真ってペーパーじゃなかったっけ？」

悠真「うん、ペーパー。車買っちゃえば練習するようになるかなって」

悠真、くしゃっと笑う。

凛太郎「形から入るにもほどがあるでしょ」

柊也「なんか悠真が桁違い過ぎて俺のすごい普通なんだけど」

陽斗「何買ったの？」

柊也「結構いいスピーカーとプロジェクター」

凛太郎「あ！　映画館みたいにできるやつでしょ？」

柊也「そうそう」

凛太郎「行きたい！」

柊也「じゃあ次はうちで映画観賞会ということで」

凛太郎「一体いつになることやら」

悠真「全員スケジュール合う奇跡的な日なんてそうそうないからね」

翼「ちょいちょい！　なんかみんな買った物紹介になっちゃってんのよ」

柊也「だってお前が最初に姪っ子に貢いでる話始めたからじゃん」

翼「いや、いいんだよ？　いいんだけどさ、

俺はもっとこう『最近共演したあの人が可愛かった』とかそういうやつが聞きたかったのよ」

凛太郎、ニヤニヤしながら陽斗を見る。

凛太郎「でもさ、やっぱ今そういうトークあるのははるピーなんじゃないのぉ？」

悠真「そうじゃん。俺らまだ報告聞いてないよ」

陽斗「なんだよ報告って」

陽斗、少し顔が赤くなっている。

悠真「えまちゃんと出かけた話」

翼「俺らちゃんとデートの案出したんだから、やっぱ聞く権利あるっしょ」

陽斗「……いや、普通に楽しかったよ？　草津まで行って、色々食べて、足湯入って」

柊也「写真とかないの？」

陽斗「まぁ、あるけど……」

と、嫌そうな顔をする。

翼「み♡せ♡ろ？」

と、手のひらを出す。

陽斗、渋々カメラロールを開いてスマホを翼に渡す。

メンバーが翼の周りに集まる。

カメラロールには陽斗とえまの写真。

悠真「うっわ何これ！　超楽しんでんじゃん！」

凛太郎「えまちゃんって私服こんなボーイッシュなの⁉　可愛い」

陽斗「いや、それはなんか万が一のために男装してくれて」

翼「やば、超いい子じゃん。結婚したい」

翼がふざける。

柊也、ニヤけながら翼の頭を叩く。

全員で二人が鮎の串を食べている動画を見る。

悠真「そしてはるピーの食リポが絶妙に下手なのがまたいいね」

凛太郎「やばい、このお互い撮りあうのキュンキュンすんだけど～」

陽斗「はいはいもう終わり！」

陽斗、照れ臭そうに翼からスマホを奪う。

翼「実際さ、えまちゃんってこの数か月間どういう心境だったんだろ。だって陽斗は推しなわけじゃん？　推しと一緒に住むって普通に考えてヤバくね？　よく落ち着いてられるよな」

悠真「それは俺も思う。だってはるピーがしばらく社長の家に住むことになって、しかも娘さんがはるピーのファンって聞いた時、申し訳ないけど俺絶対はるピーの盗撮とかネットにアップされるんじゃないかって心配してたもん」

柊也「確かに正直そういう心配もあったよな」

凛太郎「でも実際えまちゃんに会って、そういうことするような子じゃないっていうのはすぐ分かったけどね」

陽斗「そういうのはマジでなかった。前も言ったかもしれないけど、家にいる俺はユニクラウンの田中陽斗とは思われてなかった

から。本当にただの『人』って認識だったんだと思う。でも今思えば、俺のことを考えて、頑張ってそういう風に自分に言い聞かせてくれてたんだろうな」

陽斗、愛おしそうに話す。

柊也「俺は陽斗とえまちゃんすごくいいと思うんだよね。俺らの仕事に理解あるし、下手すると同じ芸能の人よりもよっぽどしっかりしてるよ。十代とは思えない」

陽斗「……いや、別にそんなんじゃないって」

翼「お前、俺らに誤魔化せると思う？　一体何年一緒にいると思ってんだよ」

悠真「そうそう」

凛太郎「はるピーはえまちゃんのこと好きなんでしょ？」

悠真「出た、凛のドストレート攻撃」

陽斗「……ノーコメントで」

と、顔を逸らす。

翼「それはもう答え言ってんのと同じだけどな」

陽斗「……もし、もし言うなら、まずは本人に伝えたいから。もし言うならね」

陽斗、ルーレットを回す。

悠真「いやぁ、漢だね」

凛太郎「カッコいい！」

柊也「じゃあ俺らはあたたかく見守るとしますか」

ルーレットが四で止まる。

陽斗、自分の車を四マス進める。

陽斗「あ、子供生まれた。みんな二十ドルちょうだい」

翼「またぁ!? お前だけなんか俺らから金取りすぎじゃね!?」

凛太郎「翼くんはさっきの株の大暴落が痛かったね」

凛太郎、陽斗に二十ドル渡す。

柊也「翼、二十ドル貸しにしとこうか？」

凛太郎「助かる～マジ神！」

柊也、陽斗に四十ドル渡す。

陽斗「みんなサンキュー！」

悠真「次誰？」

凛太郎「翼くんじゃない？」

翼「あ、俺か」

翼、ルーレットを回す。

○同・玄関（深夜）

陽斗、四人を見送る。

翼「お邪魔しましたー！」

凛太郎「ばいばーい」

柊也「陽斗ありがとな」

悠真「はるピーまた明日！　てかもう今日か」

陽斗「うん。気を付けて！」

陽斗、ドアを閉める。

四人、エレベーターへ向かう。

○同・エントランスホール（深夜）

四人、エレベーターを降りてエントランスに向かう。

翼「意外と飲み過ぎた」

悠真「俺明日起きれるか不安になってきた」

凛太郎「モニコしようか？」

悠真「凛は普通に『ごめん寝てたー』とか言ってきそうだからやめとく」

凛太郎「それひどくない!?」

柊也「お前らもうちょっと声落とせって」

外から帽子を被った男女のカップルが入って来て四人とすれ違う。

悠真、立ち止まって振り返る。

カップルはエレベーターに乗り込む。

柊也、悠真を振り返って、

柊也「悠真どうかした？」

悠真、小走りで加藤たちの方へ行く。

悠真「いや。今すれ違ったの山口さんだった気がする……」

柊也「え、マジ？　ここに住んでんのかな」

悠真「それか隣にいた男の家とか？」

翼「気のせいじゃん？」

悠真「……そうだよな！」

四人、エントランス前のタクシーに乗り込む。

○同・美玲の部屋・リビング（深夜）

美玲と恋人、お揃いの部屋着を着てソファに座りテレビを見てる。

恋人「それなんのドラマ？」

美玲「年の差恋愛の話。すごい人気なんだよ？　もう終わったけど」

恋人「へぇ～」

と、自分の手を美玲の手に絡める。

美玲、恋人がつけているリングが目に入る。

美玲「これ……」

美玲、恋人の手をとってリングを触る。

恋人「あーそう。前に美玲がネットで検索してたの見てたら欲しくなって買った」

美玲「いいじゃん似合ってる！　私もはめていい？」

恋人「いいけど大きいよ」

美玲、リングを自分の左手の薬指にはめる。

美玲「ほんとだ。大きいね」

恋人「だろ？」

美玲、スマホを取り出してリングをはめた自分の手を撮影する。

テレビ画面と美玲の部屋着のパーカーと恋人の部屋着のズボンが見切れて写っている。

恋人、立ち上がって美玲の手を引く。

恋人「そろそろ寝よ。もう遅いよ」

美玲「すぐ行くから先行ってて」

恋人、手を離して寝室へ向かう。

美玲、スマホで何かをする。

満足げな顔をして立ち上がり、テレビを消してリビングの電気を消す。

（了）